私はだれ

今日も流れ星が流れた。

　きらきら流れて、夜空を駆けていく。

　私はその光景に魅了される。

　人々が寝静まる時間。

　夜更かしする人は起きているでしょうけど、私の他には誰もいない。静かな時間。

　そんな時間を彩るように夜空を駆ける流れ星。

　ベッドの上から動かない私が見る、幻想的で奇跡に似た光景。

　本当は、身体の弱い私はこの時間までは起きていてはいけない。早く眠らなければ、心配性なお姉様が、様子を見に来た時に怒られてしまう。

　でも、今日は、今日だけは、特別。

　ニュースで聞いた流れ星をいつか自分の目で一度で、一瞬でいいから見るのだと心に決めていた。

　だからなれない夜更かしをして、しまい。お姉様が寝付く時間を見計らって窓の外を見上げ続けていると、沢山の流れ星を見ることが出来た。

　とても幸せな光景だった。

　学校で仲の良い。友達たちにも見せてあげたい。

　でも、同時にここから見えるこの景色を私だけのものにしたい、と言う。独占欲が出てきて、私は戸惑ってしまいました。

　ただ、あまりなれない夜更かしはするものではありませんね。

　こちらがその時を待たずとも枕に頭を添えれば自然と睡魔が襲ってきました。

「――起きて、起きなさい」

　朝から、太陽の光と共に私を起こす声が聞こえる。

　誰だろう。

「起きなさい」

「あ、お母様。

おはようございます。お姉様は？」

　いつもならお姉様が私を起こしにくるはずなのに今日はどうしたのだろうか、そう思い私がお母様に訊ねると、お母様は何を言われたのか分からないとでも言いたげな表情をした。

「お、お姉ちゃん？　あなたお姉ちゃんが居たの？」

　私にさも当たり前なことを訊ねてくる。

　お母様はどうしたのだろうか？　様子がおかしい。

「いるよ。あたりまえでしょう？」

「そ、そう……そうよね」

　この人は、時々訳の分からないことを言う。

　今だってそう自分の娘を忘れるなんて、なんて薄情な人だろうか？

「お姉ちゃんは、今日は遅刻しそうだったから、もう学校に行ったの」

　嘘だ。この人は、嘘をついている。

　お姉様が私に構わずこの家を後にするなんて考えられない。

　それにお姉様は既に学生ではない。

　なら、この人は誰だ。お母様と同じお顔で、同じお声で話すこの女性は誰だ？

「あなたは、誰なのですか？」

　私は彼女に問うた。私の為に車椅子を用意して、それに私を乗せてくれているその女性がどうしても悪い人とは、思えない。では、なぜ彼女はくだらない嘘をつく必要があるのか？

　私にわからないことは増えていく。

「私？　私はあなたのお母さんよ。

　もしかして、忘れてしまったの？」

　そんな、と彼女は目に見えてショックを受けているようだ。私の中で生じた何気ない問いが私の為に頑張っている彼女を傷つけてしまったのだろう。

　私の為にこれほどの涙を流しているのは、血を分けたお姉様やお母様に違いない。

　では、このお母様は、どうしてお姉様のことを知らないのだろうか？　同じ家で暮らしているのに……。

「申し訳ございません、お母様。私が間違っていました。

　あの、お姉様のお部屋へ連れて行ってもらえますか？」

「ど、どうして？」

「いえ、特別な理由はございませんが、既にお出かけになっているのであれ、お姉様にご挨拶をしなければと思いまして」

「そ、そう」

　私はお母様に車椅子を押してもらいながら、お姉様のお部屋に入る。

　そこには、どうしてか、まるで生活感のないお部屋があった。

「あれ？　お姉様は？」

　この部屋はまるで同じ家の部屋とは思えないほどに閑散としていた。調度品の一つもろくにない。まるで、何か月と人の住んでいないような部屋。

「あの、お母様。お部屋をお間違いでは――」

　ありませんか？　そう訊ねようとしたとき、先ほどまでお母様の立っていた場所から同じ服を着たマネキン人形が倒れてきた。

「え？」

　何が起きているのだろうか、どうしてこの家には、何もないのだろうか？

　人の生きている気配のしない家。

　私は、だれ？

　誰か、教えて。私は答えを求めて家の中を走り回る。

　だが、この家には個々人を示すものはどこにもない。家族写真も無ければ、私の保険証も、下駄箱にだって、私の靴すらない。

　誰なの？　私は……。

　誰か、押して。

　私のことを――。

　私の家族のことを――。